

修士論文（要旨）

2025 年 1 月

大学生における情動知能と
友人関係，学校適応感との関連について

指導 山口 一 教授

国際学術研究科

国際学術専攻

心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野

223J2008

鈴木 麻子

Master's Thesis (Abstract)

January 2025

Effects of the emotional intelligence on
peer relationships and school adaptation
in university students.

Asako SUZUKI

223J2008

Master of Arts Program in Clinical Psychology

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor : Hajime YAMAGUCHI

目次

第1章	問題の背景と所在	1
第2章	研究目的と予想される結果	2
2-1	研究目的	2
2-2	予想される結果	3
第3章	方法	3
3-1	調査対象者	3
3-2	調査時期	3
3-3	調査方法	3
3-4	調査票	4
3-5	倫理的配慮	4
3-6	分析方法	5
第4章	結果	5
4-1	分析対象者	5
4-2	友人関係尺度（岡田，2007）のモデル図の検証	5
4-3	基礎統計量と男女差の検討	7
4-4	男女別の下位尺度間の相関	8
4-5	男女別の情動知能と友人関係，学校適応感との関連	9
第5章	考察	11
5-1	友人関係尺度のモデル図の検証について	11
5-2	J-WLEIS と友人関係尺度，青年用適応感尺度の性差について	12
5-3	情動知能と友人関係，大学適応感の尺度間相関について	12
5-4	情動知能と友人関係，大学適応感の関連について	13
5-5	総合考察	15
5-6	本研究の限界と今後の課題	15

謝辞

引用文献

【資料】

1. 教員への調査協力をお願い
2. 日本版 Wong and Law Emotional Intelligence Scale (J-WLEIS) (豊田・山本，2011)
3. 友人関係尺度（岡田，2007）
4. 青年用適応感尺度（大久保，2005）
5. 調査対象者への調査協力をお願い

本研究は、男女大学生 209 名（男性：86 名，女性：123 名）を対象に，大学生の情動知能と友人関係，学校適応感がどのように関連しているかを検討することを目的としている。「学生生活不適応・修学意欲低下」（文部科学省，2021）や「学業不振・無関心」，「人間関係・大学生生活不適応」（堀ら，2015）を理由に大学生の中途退学が増加傾向にあるといわれている。これを踏まえ，大学生の情動知能が，友人関係を介して適応感とどのような関連性があるのかを検討していく。「自分自身や他者の情動を認識したり，表出したり，また理解したり，コントロールしたりする知能」（小松・箱田，2011）とされている情動知能は，他者とより良い社会的関係を構築する上で，欠かすことのできない能力（豊田ら，2007）であるといえる。そのため，本研究の成果によって，大学生の情動知能と友人関係，学校適応感との関連が明らかとなれば，中途退学や学校不適応に陥っている，または，陥るおそれのある大学生へ，友人関係を通じた情動面でのアプローチが可能となるのではないかと期待できる。

そこで本研究は，18～25 歳の男女大学生を対象に，日本版 Wong and Law Emotional Intelligence Scale（以下：J-WLEIS）（豊田・山本，2011）と友人関係尺度（岡田，2007），青年用適応感尺度（大久保，2005）を用いて質問紙調査を実施した。まず，友人関係尺度について信頼性を確認したところ， α 係数が低い値を示したため，3 因子構造を仮定して探索的因子分析を行った。その結果，「親密性」，「評価懸念」，「配慮・気遣い」を下位尺度とする全 19 項目の尺度にまとまった。次に，性差の検討をするために対応のない t 検定を実施したところ，「情動の調節」で女性よりも男性の方が高い得点を，「評価懸念」で男性よりも女性の方が高い得点をそれぞれ示し，性差が認められた。男女別で実施した尺度間相関について，男女ともに各尺度間でそれぞれ相関が認められる結果を示した。最後に，それぞれの関連を検討するために共分散構造分析を実施したところ，男性では，「自己の情動評価」が「配慮・気遣い」を介して，「他者の情動評価」が「親密性」や「配慮・気遣い」を介して大学適応感に正の影響を及ぼす可能性があること，また，「自己の情動評価」が「配慮・気遣い」を通じて，「他者の情動評価」が「評価懸念」を通じてそれぞれ，「劣等感の無さ」に正負の影響を及ぼし得ることが示された。これは，自己の情動を高く評価し，友人に対する配慮をしていることで劣等感を低減させること，逆に，他者の情動に対して敏感であることで，友人からの評価を気にし，それが劣等感の増大につながる可能性を示唆している。さらに，「情動の利用」は大学適応感を高める直接効果として機能し得るという結果が得られた。女性では，「自己の情動評価」が「評価懸念」を介して，「他者の情動評価」が「評価懸念」と「配慮・気遣い」を介して，それぞれ大学適応感を高める要因であることが示された。これらの関連に加え，「情動の調節」は「配慮・気遣い」を介してそれぞれ，「劣等感の無さ」に正負の影響を及ぼすという結果が得られた。また，「親密性」は大学適応感を高め，劣等感の低減につながる直接的要因として影響していること，「情動の調節」と「情動の利用」が直接効果として大学適応感を高める要因となり得ることが明らかとなった。

これらの結果から，男女ともに情動知能の高さが大学適応感を高める直接的な要因となり得ること，情動知能をうまく活用した友人との関わりを通じて大学適応感へとつながり得る可能性があることが示唆され，仮説モデルとある程度一致する結果となり，仮説は支持された。大学生における学校不適応の防止，ひいては学校不適応を理由とした大学生の中途退学者の予防を目指し，自他の感情を理解したり受け止めたり，自己の感情を調節したりする情動知能を高めていく，あるいは個人の持つ情動知能を適切に活用できるようにしていくといった，情動面に焦点を当てたアプローチが直接的に適応感と関連すること，友人関係の良好さを介して大学への適応感につながることで，不適応感を低減することに有効であることが明らかとなった。

本研究では，情動知能に焦点を当てて検討することを最終的な目的としていたため，本

研究で得られた結果から具体的なアプローチが明確化されたとは言い難い。そのため、情動知能が直接効果として適応感を高め得ること、情動知能が友人関係を介して適応感を高め得ること、また対人関係に対する劣等感の増大、低減につながり得ることという結果のそれぞれに対する、アプローチの検討が必要不可欠であり、本研究における今後の課題として残る結果となった。

引用文献

- 橋本由里・平井由佳（2014）．専攻別比較からみた看護学生の情動知能特性 島根県立大学出雲キャンパス紀要, *9*, 9-16.
- 堀有喜衣・小杉礼子・喜始照宣（2015）．調査シリーズ No.138 “大学等中退者の就労と意識に関する研究” 独立行政方針労働政策研究・研修機構 Retrieved December 23, 2024 from <https://www.jil.go.jp/institute/research/2015/138.html>.
- 池上貴美子（2016）．女子短大生の対人距離に関する親密性の要因の検討 甲子園短期大学紀要, *34*, 1-7.
- 嘉瀬貴祥・遠藤伸太郎・飯村周平・大石和男（2013）．大学生におけるライフスキルと攻撃性および精神的健康との関連 学校保健研究, *55* (5), 402-413.
- 北原祐理（2019）．中学生における感情制御方略と学校適応感の関連—ソーシャル・サポートを媒介変数として— 感情心理学研究, *27*, Supplement, 14.
- 小松佐穂子・箱田裕司（2011）．情動性知能に関する研究の動向 九州大学心理学研究, *12*, 25-32.
- 文部科学省（2024）．“令和 5 年度 学生の中途退学者・休学者に関する調査結果”（令和 6 年 6 月 28 日公表） Retrieved July 11, 2024 from https://www.mext.go.jp/content/20240627-mxt_gakushi01-000013028_1.pdf.
- 永井暁行（2016）．大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連 教育心理学研究, *64* (2), 199-211.
- 野崎優樹（2012）．自己領域と他者領域の区分に基づいたレジリエンス及びストレス経験からの成長と情動知能の関連 パーソナリティ研究, *20* (3), 179-192.
- 岡田努（1999）．現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, *9*, 29-39.
- 岡田努（2007）．大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, *15* (2), 135-148.
- 大久保智生（2005）．青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, *53* (3), 307-319.
- 鈴木貴美子・長江美代子（2012）．大学生の友人関係のありかたとアイデンティティの発達 日本赤十字豊田看護大学紀要, *7* (1), 133-144.
- 豊田弘司（2013）．小学生と大学生における居場所（「安心できる人」）と情動知能の関係 教育実践開発研究センター研究紀要, *22*, 19-25.
- 豊田弘司・大賀香織・岡村季光（2007）．居場所（「安心できる人」）と情動知能が孤独感に及ぼす効果 奈良教育大学紀要, *56* (1), 41-45.
- 豊田弘司・山本晃輔（2011）．日本版 WLEIS（Wong and Law Emotional Intelligence Scale）の作成 教育実践総合センター研究紀要, *20*, 7-12.